

# なぜ、留学生はスタバの前でたむろするのか？

2022/02/11



あるアメリカの教授が大学の紀要に、「なぜ、留学生はスタバの前でたむろするのか？」という論文を掲載しました。答は、「彼らは居場所がないからだ」でした。だれにとっても居場所がないのは辛いことです。一般に「居場所」といえば、家庭です。そして、職場や学校であり、友人との会合や趣味の集まりです。私がいつもある講座に向かうたびに日本語学校の前を通ります。そこでは、肌の色や髪の色が違う若者たちが何人も集まって立ち話をしているのを見ます。そのときいつも、この「紀要」の論文を思い出します。彼らはなにをしているのでしょうか？ それとも、なにもしていないのでしょうか？ なにもできないのでしょうか？ でも、「論文」の趣旨と違って、みんな楽しそうです。

## 居場所があること。

「居場所」は、自分の存在を認めてくれる場所です。そこでは、だれもが歓迎されているのです。そこには、「生きている喜び」があります。すなわち、いま現在、心が平安で、動揺のない、安定した、愉楽の状態であることを体

験している喜びです。いま現在、身分の上下もなく、敵味方の対立もなく、差別も、分裂も分離もない、すべてが自由で公平で満ち足りた状況です。いま現在、ここに、こうしていることの喜びです。

「この心の喜びを伝えるのにもっともふさわしいものをひとつ挙げなさい」と言われれば、躊躇(ちゅうちょ)なく、イギリスの詩人ロバート・ブラウニング (Robert Browning, 1812-1889) の 劇詩『ピッパが通る』(Pippa Passes : 1841) の一節を挙げるでしょう。これは、日本では、上田敏の訳詩集『海潮音』(1905) で「春の朝」(はるのあした)として夙(つと)に有名です。そして、カナダの作家 L・M・モンゴメリが 1908 年に発表した長編小説『赤毛のアン』(“Anne of Green Gables” : 1908) の最後の最後に引用されている詩としても有名です — 「『神、そらに知ろしめす。すべて世は事も無し』とアンはささやきました」(“God's in his heaven, all's right with the world,” whispered Anne softly.)。この詩を読むと、だれでも、思わず笑みがこぼれます。人生最高の喜びであり、笑いです。文中の "God's" や "all's" は、"God is" と "all is" です。

<i>Pippa's Song</i>	ピッパが通る
The year's at the spring And day's at the morn; Morning's at seven; The hill - side's dew - pearled; The lark's on the wing; The snail's on the thorn; God's in his heaven — All's right with the world!	時は春、 日は朝(あした)、 朝は七時(ななとき)、 片岡に露みちて、 揚雲雀(あげひばり)名乗りいで、 蝸牛(かたつむり)枝に這ひ、 神、そらに知ろしめす。 すべて世は事も無し。

この有名な詩のどこがいいのでしょうか？ この詩のどこに、居場所が描かれているのでしょうか？ どこに、心が満ち足りた「微笑み」(smile)があるのでしょうか？

**自由でいることの喜び** ピッパとは少女の名前です。ピッパ (Pippa) はフィリッパ (Philippa) の愛称です。まだ幼さが残るピッパは、北イタリアのアーゾロという町の紡績工場で働いています。年にたった1度しかないお休みの日、ピッパは この美しい春の朝に与えられた神さまの恵みを声を出しながら、心から賛美して、街の細い通りを歩いていきます。その通りの両側にはさまざまな状況に陥った不幸で不運な人たちが住んでいます。ピッパの神さまを賛美する声を聴いて、自分の邪(よこしま)な心に気づき、次々に「回心」(reformation : 悔い改める)していきます。もちろん無心なピッパはだれかを回心させることを意図しているわけではありません。ただいまここに、休みをとって自由でいることがうれしくて、神さまに感謝して自分の心の喜びを歌っているだけでした。そんなピッパが、「時は春、日は朝」と言いながら街中を通った (pass) だけで、人々は回心したのです。

**なんでもあり** 普通の詩と違って、この「ピッパが通る」は、もともと

韻を踏んでいない「ブランク・ヴァース」(無韻詩: Blank verse) ですから、詩の一つ一つの言葉を厳密に考えることはありません。時は、春でも秋でも良く、朝でも夜でも良く、場所は、岡でも山でも海でも森でもいいのです。生き物は、ヒバリやカタツムリでなくてもよく、蝶々でも人間でもブランク・トンでもいいのです。人間は、お金持ちでも貧乏人でもよく、男でも女でも、どこの国の人でも、難民でも失業者でも、キリスト教徒でもイスラム教徒でも仏教徒でもいいのです。要は、いつ何時(なんどき)でも、地球上のどこでもよく、生き物は動物でも植物でもいいのです。返ってそう解釈しないと、この詩の意味が分からないことになります。天は、「すべてのものが、いま、ここにいていい」といっているのですから。

美学者の S・K・ランガー (Susanne Knauth Langer (1895-1985) さんはいいます —

それは型破りの構造であって、短い一行一行がみな一つの独立した叙述になっている。そして最初の三行には、同じ口語的な言い回しで、つぎつぎに素気ない叙述がくり返えされていくので、三度目に出てくると、わざとらしく聞こえる。しかしそこで、最初のイメージがはじめて現われる。詩の型式はあくまで図式的である。すなわち、三つの行は何かがある「に」(at) あるのを述べ、つぎにその状況を述べる陳述である。つぎの三つの行は、何かがある「上に」(on)、または「のなかに」(in) あることを述べて、さらにまたその状況を述べるが、こんどはそれがまったく一般的、普遍的なものとなる。それはどのように聞こえるのか — 「全員乗船！」という意味の点呼のように聞こえる。甲の乗員はあそこにおり、乙の乗員はあそこにいる — 一人はこの位置におり、一人は他の位置にいる — 舷側は岸を離れ、各員はその部署につき、船長も船橋の部署について — 船は出航の用意がととのった。

発進の準備、期待 — このような感情の見事な抽象を作り出すのは、この人員点呼的な構成であるが、それが、通常の上生活の背景から、田園のそれにおきかえられ、「アイアイサー」(判りました)、という男性的な大声を一少女の歌に変え、荒海のイメージを露にぬれたなだらかな坂道に変形した構成なのである。そこには船のことも、船の比喩もまったく現われない。ただ、夜が明けて朝が始まる、同じ感じがあるだけである。

[S・K・ランガー著『芸術とは何か』池上保太・矢野萬里訳・岩波新書]

そして、最後にランガーさんはいいます —

基調となる行は、「神、そらにしろしめす」に外ならなかった。

居場所 では、神は、なにを「しろしめす」(命じて治めている)のでしょうか？ それは、すなわち、「すべて世は事も無し」です。私たちが、いえ、すべての生物が、いまここにいるのは、「おまえたちはいまここにいてよい」と

世界を創造した神さま、すなわち「天＝自然」が、「しろしめす」から、いまここにいるのです。これを「天の配剤(はいざい)」（天[自然]のやり方: the ways of Heaven)とといいます。だれでもみんな、いま、ここにいていいのです。これこそ、「安寧」(あんねい: peace)であり、「愉楽」(ゆらく: 楽しみ)であり、「快感」です。この「心おだやかな幸せ」には、思わず笑ってしまいます。そのことを絵にしたのがこの冒頭のカットです。鶴田美優(高2)が描きました。

だれにでも、居場所があります。このことを、「この広い海に、一滴の水も不足していない」とアン・モロー・リンドバーグはいいます。(『海からの贈り物』1955) この地球には、あなたも、私も、誰一人不足していないのです。あなたは、いま、ここにいていいのです。わたしもそのつもりでいます。

この世で一番大切なことは、福澤諭吉がいうように「安寧愉楽」(あんねい いつらく)であると、このことを、私は言いたかったからです。「だれもが、いまここにいていい」という世界こそ、理想の世界です。いま、一番、世界中の人たちが願っているのは、「難民問題」の解決です。すなわち、居場所がなく困っているすべての人に対して、「あなたは、いまここにいていい」と言えるようにすることです。

## もののあはれの付け句

もし、日本にも、「ピッパが通る」のような「詩」があるとすれば、例えばそれは、詩ではありませんが、付け句集『無玉川』の次の句がそれです。

獵師の妻の 虹に見惚れる

この山中の狩人の詫(わ)びた夫婦の朝を歌った句を、日本文学の短詩系芸術の上位に置く人がいるとするならば、私たちと共にもののあはれを語れる人です。ここには、登場人物が三人います。だれと、だれと、だれでしょうか？ そうです、狩人とその妻と、もう一人は、この句の作者です。

私が思うに、その句意は —

山にわか雨が降ってきた。意外に激しい雨で、朝早くから獵に出たままの亭主がこの雨に難渋(なんじゅう)しているのではないかと、家に一人残された女房は心配でなりません。あまり雨が激しいので外へも出られず、そっと窓から覗いているだけでした。やっと雨が晴れたので外へ出て亭主が出かけた方をながめていると、向かいの山に虹が架(か)かっている。思わず、「まあ、きれいだわ」と、亭主のことなど忘れてしばし見とれていました。

**開放感** この句が、奇跡をみるように凄いの、最後の「見惚(ほ)れる」と言う言葉です。虹に見惚れて、しばし亭主のことを忘れた としてもそれは

女房の罪ではありません。人生、「女」にはそういった時もあるのです。特に、あまり、「惚(ほ)れた腫(は)れた」の世界とは縁のない山奥の杣(そま:山家)の育ちの女には、惚れる相手は皆無(かいむ)です。そんな女が惚れるのは、自然の美であり、雨上がりの開放感なのです。たまたま、虹に惚れたことが、もし、女房の罪であったとしても、作者は、その罪を許しているのです。この句の「見惚れる」の一言は、亭主の身を案じて心も潰れそうになっていたとき、女房が空にかかった虹を見ておもわず、「きれいだわ」とおもって微笑んだとき、その一瞬、夫への気遣いを忘れることが出来たことを、作者は、「それはいいことだ」といっているのです。

**もののあわれ** これこそ、アリストテレスの言う「カタルシス」などの西洋語で表すことはできない、日本人の「もののあはれ」です。いまの言葉で言えば、「心のリセット」です。きれいな虹が、亭主のことも、驟雨(しゅうう:激しいわか雨)のことも、危険な獵(う)のことも、すべて一切を忘れさせてくれたのです。着物や宝石や花や美男の役者などなど、きれいなものにみとれるのは「女の性」(さが)です。その美しい虹を美しいとみる女の性が、「女房の不安な心を救ってくれたのだ」と第三者である作者はいうのです。私がこの句を知ったのは岩波書店発刊の月間冊子の『図書』の連載された作家の田辺聖子さんのエッセイ「武玉川(むたまがわ)・とくとく清水(しみず)」からです。田辺さんはこの句を特別感心して誉めていました。(岩波新書『武玉川・とくとく清水 — 古川柳の世界』としてまとめられました)

**人情の滑稽さ** ここには川柳ならではの、実際には「武玉川」の句は川柳ではなく「付け句」といいますが、生活感からきた人情味溢れる「快樂＝滑稽さ」があります。虹が美しいとみるのは、人類、万物の趣(おもむき:味わい)です。でも、それを山の中にいる獵師の妻だけが、他のこの世のだれよりも真っ先に見る雨上がりの出来たばかりの虹は、また格別の美しさだったでしょう。和歌にも、芭蕉にも、マラルメやヴェルレーヌにも、ゲーテにもシラーにも、この世のどの文学にも、武玉川の付け句の「人情の滑稽さ＝快樂」はありません。日常的には、にわか雨が降ったときに、碁を打ちに出かけた亭主の帰りを心配して、女房が傘と下駄を持って迎えに来たといったことはあるでしょう。そして、そのことを句や歌に詠んだこともあるでしょう。そのことも含めて、この句を、「奇跡だ」といったのは、むくつけき獵師と峨々たる山と驟雨と心弱き妻と美しい虹の絶妙なとり合わせを生み出した作者の想像力とそれを簡潔に付け句にまとめた創造力と構成力とそれを可能にした日本の短詩系文学の形式に対してです。考えるだに、なんとも不思議ないい句です。

そこで思わず、朝、目が覚めて、いつものように家内が隣にいたときに、「女房の朝見る顔の懐かしさ」という句が、私にも自然にでてきました。

## 笑いには ある種の難解さ

**親しみやすい** さて、「ピッパが通る」と「獵師の妻」についてですが、この二つにもまた、芸術特有の「分かり難さ」があります。言葉そのものは容易ではあるのですが、どちらも、「状況を理解すること」の難しさがあります。例えばそれは、文学者アランがいうように、「大小説には必ず退屈な箇所

があって、怠慢な読者を追っ払うように出来ている」というような大小説風な退屈で、難解なものではありません。この二つの詩句は、特に難しいことを言っているわけではありません。言葉も平易で美しく、言葉のリズムも使い方も、親しみやすいものです。すべて、作者が日常用いている「手持ちの言葉」ばかりです。これを読んだり聞いたりする私たちを、内容的にも、思想的にも、表現においても、追い詰めたり、疲れさせたりはしません。特に、教育的でも、道徳的でも、教訓的でも、説教的でも、宗教的でも、儒教的でもありません。ただ、涙が出るほど、懐かしく、嬉しいのです。

## 省略の美とそれを埋める喜び

**難解さ** このように、「ピッパが通る」と「猟師の妻」との間には、表現的に大きな違いがあります。それは、「ピッパが通る」には、すべてが言い尽くされていて、「省略」がないことです。だれが読んでも聞いても、直ぐに詩人が言いたい「天の配剤」の意味がよくわかります。予備的知識や特殊な読解力の訓練などは必要ありません。しかし「猟師の妻」の場合は、「省略」だらけです。この二人の住んでいる環境が分からなければこの句の内容はさっぱり分かりません。しかし、私たちには「猟師の妻」という言葉から、夫婦が二人だけで山奥の山中に住んでいて、猟を生活の伝手(つて)としていることさえわかればそれでいいのです。ここで「山奥の山中」とは変な言い方ですが、「深山幽谷」といってしまうと仙人や隠者や憂国の士が隠れ住んでいるように思われるので止めました。むろん猟師の生活とは、日本の社会独自の「閉塞性」とはまったく無縁のもので、世界中にある狩人の「活計」(たずき:生活の手段)のことなのであります。極東にある日本文学の独自性は、その地域性のある文化と日本語のセイだとよく言われます。しかし、この付け句の省略の手法は、国際性や近代性や異国性などから来る難解さなどではありません。

**共感** 「猟師の妻」の句が難解であるとするならば、この場合の「孤独な夫婦の親身な愛情」と「自然現象としての虹」との間に生まれた「連続性と乖離(かいり)性の劇的な展開」に対する「人間的なこころの動き」が語られていないことです。この句における一番大事なことが、この『武玉川』では省略されているのです。なぜ、省略されているかといえば、作者と鑑賞者とのあいだに説明不要な「共通基盤」、すなわち、だれにでもわかる「夫婦だけの秘密の愛」があるから、その「秘密」を改めて述べる必要がないからです。妻からは猟をする夫への気遣いがあり、夫からは妻の孤独を虹が慰めていてくれるであろうという気遣いです。これは、全世界共通なものです。省略していいのです。いえ、逆に、この「わざと作られた省略」を経験と愛情と思いやりで埋めることに、私たちは人生最大の喜びを見いだすのです。それも、この省略にわれ一人のみ密かに気がついて、その語れていない部分を想像しながら埋めることこそ、この句を愛(め)でる個人的な喜びと誇りがあるのです。

## なぜ、留学生はスタバの前でたむろするのか？

さて、もう一度、最初の問いに答えましょう。アメリカの学者の答は、「彼らは居場所がないからだ」でした。でも、私が見た日本語学校の前にたたずんでいる学生たちは、みんな楽しそうです。どうも、スタバにたむろする彼

らは、学者がいうように、孤独でも不幸せでもなさそうです。かれらがたむろするのは、そこに、仲間がいるからです。そこがどこであれ、「居場所」とは、「パートナー」がいるところです。居場所には、そのどこにも一人や複数のパートナーがいます。家庭にも地域にも、職場にも学校にも、旧友たちや趣味の集いにも、「自分のパート(部分)の一部であり、喜びと悲しみを共にするパートナー」がいます。もし、パートナーがいなければ、そこはその人の「居場所」にはなりません。まさに、"Stand by me." や "Stay with you." の世界です。

したがって、私の「なぜ、留学生はスタバの前でたむろするのか？」の答えは、「そこにパートナーがいるからだ」です。なかでも一番大事なパートナーは、「助言をしてくれる人」です。日常生活での困りごとを初めてとして、仕事や研究と言った専門的な問題で悩んでいるときに解決策を与えてくれる人です。特に、優れた先生や先輩や共同研究者がそれです。ノーベル賞などのような偉大な研究は、才能あるパートナー同士の話し合いから生まれます。それが、偉大な先生でなくても、身近な夫や妻であっても、兄弟であっても、親しい友人であってもかまいません。そのためには、どんな人であっても、まず、相手を尊敬することです。尊敬して、素直に応じることです。

“ Many receive advice, only the wise profit from it. ” (アドバイスをもらう人は多い。でも、その恩恵を受けるのは賢い人だけ)と米国の小説家ハーバー・リーは言っています。

都築正道